

志賀直哉『和解』論—叙述に着目して

王嘉臨/ Wang, Chia-Lin

淡江大學日本語文學系助理教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

《和解》是志賀直哉的代表作之一。自 1917 年小說發表以來至今陸續出現了許多重要的研究成果。綜觀現有的《和解》研究大多著眼於探討血緣關係的層面上。而本論文則著眼於敘事模式，重新探究《和解》這篇小說的故事內容。

考察結果得知：在小說中除了描寫與父親和解的過程之外，在時間排列上及故事內容上更負載著追尋情感(氣分)及自然的層面。在《和解》這篇小說中所呈現的這兩種面向，並非是創作上嚴重缺失，其更刻劃出作者志賀在文學創作上新的創作方法。如實地表達出與父親和解的過程，《和解》延襲了私小說的創作方式，另一方面透過情感(氣分)的追尋，形成了另一種自然的言說。《和解》這部作品不單只是描寫與父親和解的過程，最重要的是它呈現出作者在當代文學寫作環境下所達到的新境界。

【關鍵詞】

《和解》、敘事方法、血緣、氣分、私小說

【Abstract】

"Wakai" is one of the representative works of Shiga. This text has been read as a story kin, immediate family of the conventional. This paper focus on the narrative of the work in this paper and wish to re-captured this novel.

A result of the discussion, it can be seen that the history of discord with his father also being drawn into the work, it is focused in <mood>, it is oriented towards naturalness of <mood> have also been presented. "Wakai" is in the form of how Shiga's proprietary completed within the framework of the I novel of Japan.

【Keywords】

"Wakai", theory of narrative, kin, mood, I novel

1 はじめに

志賀直哉『和解』は大正六年十月に『黒潮』に発表された。その後、第二子出産の場面にあたる「十」が加筆され、大正七年一月新潮社刊行の作品集『夜の光』に収められた。大正八年には、この『和解』の一部を「慧子の死」と題して独立させ、白樺同人の合著『白樺の園』にも収められることとなった。

また、大正六年は、志賀直哉にとって、数年の沈黙期を経て執筆を再開した時期であり、「城の崎にて」、「佐々木の場合」、「好人物の夫婦」、「赤西蠣太」などといった作品が執筆された。そして、『和解』は周知のように志賀の実生活に基づいている作品である。『和解』を書いた頃のことを、志賀は「続創作余談」において、次のように述べている。

「和解」は作中にも書いたやうに、其時約束の仕事をしてゐる最中だったが、父との和解が気持よく出来、その喜びと亢奮で、和解の方を材料にして一ツ氣に書いて了つた。毎日十枚平均で半月間に書上げた。一ト晩だけ泊客があつて書けない夜があつたが、二十枚書けた日があつて、結局十枚平均になつた。十枚平均十五日といふことは私にとっては後にも前にもないレコードである。(下線発表者、以下同様)

このように、『和解』は大正六年八月末の志賀自身の父親との和解を題材とし、志賀の実生活に基づいた作品であるため、従来「私小説」として捉えられてきた¹。しかし、この作品の語りは、志賀の他の私小説に見受けられる首尾一貫した時間の構成とは異なり、時間の構成が錯綜している。例えば、その錯綜した時間構成を初めに整理した須藤松雄は、『和解』における「時間」について、「時間的關係の処理が簡単ではなく、それがすらすらと理解されにくい」と時間の混乱を指摘し、作品の構成を批判的に論じている²。また、本多秋五も「構成が風通し悪くできていて、作品内部の時間が錯雑し、一読明瞭という

¹ 竹盛天雄(1970)「志賀直哉における父と子(四)―「黒い魔術」からの解放―」(『国文学解釈と教材の研究』第15巻16号)、国松昭(1977)「志賀直哉における「和解」」(『東京外国語大学論集』第27号)、西垣勤(1986)「和解」(三好行雄編『日本の近代小説Ⅰ』東京大学出版会)、澤宮優(1995)「「和解」ノート―志賀直哉の自然観を中心に―」(『論究』第42号)参照

² 須藤松雄(1963)『志賀直哉の文学』南雲堂桜楓社P163

わけに行かない」などと述べている³。

一方、これらの論に対して山田有策は「構成と作品内時間との関係も実に緊密で、作品としての完成度を十二分に保障している」⁴と述べ、肯定的に解釈している。そして、山田はこの作品のメインテーマについて「＜和解＞への姿勢に到り着く道程に他ならない。その道程の整備に作者は全力を傾注しているのであって、作者はそれを血縁の強い結びつきの自覚という形でなしとげていたと言えよう。その点では回想は実に明瞭な一本の太い線で貫ぬかれていて、無駄は全くないと言ってよい」と指摘した⁵。山田が提示した「＜和解＞への姿勢に到り着く道程」という作品に対する理解は以後の研究に大きな影響を与え、継承されている⁶。

また、「物語が帰着する父子の和解を、父親を頂点とする「家」に順吉が再度組み込まれる物語」⁷とし、『和解』を「血縁共同体のドラマ」と解釈する論も出されている。初期には、竹盛天雄が主人公順吉の「血縁的肉親的感情」を指摘した⁸。その後、父子関係のみならず、他の登場人物に目を向けた研究も見られるようになる。池内輝雄は母親を「＜和解＞を可能にさせ、＜和解＞へ導いた原動力」、「＜和解＞を要請し、斡旋する者」と位置づける⁹。また、伊藤佐枝は妻を「一種強力な和解斡旋者」としている¹⁰。

確かに、こうした「＜和解＞への姿勢に到り着く道程」、「血縁共同体のドラマ」とする物語の解釈はテキストで語られた、乱雑した叙述を統括的に捉える一つの切り口であるということについては、本論も異を唱えるものではない。しかし、「氏（山田有策 注・筆者）は竹盛氏にならって『和解』を「肉親的血縁的」な結びつきのドラマとして理解しているようであるが、それだけならば何も「実に鋭い指摘」と驚いて見せる必要のない、作品の外貌通りの解釈な

³ 本多秋五(1984)「晩拾志賀直哉（九）—『和解』の成立」『群像』第39巻9号・後本多秋五『志賀直哉（下）』（岩波書店、1990.2）に所収）P14

⁴ 山田有策(1982)「『和解』の構造」『一冊の講座・志賀直哉』有精堂P83

⁵ 同前掲山田有策「『和解』の構造」P82~83

⁶ 宮越勉(1991)『志賀直哉—青春の構図』、下岡友加(1999)「志賀直哉『和解』論—劇的な＜和解＞を生成するもの—」（『近代文学試論』第37号）参照

⁷ 吉岡真緒(2004)「志賀直哉『和解』論—和解の重層性」『活水日文』第45号P55

⁸ 同前掲竹盛天雄「志賀直哉における父と子（四）—「黒い魔術」からの解放—」P193

⁹ 池内輝雄(1994)「志賀直哉『和解』における語り手の意識構造—＜母＞＜義母＞の発見—」『国文学解釈と鑑賞』第59巻4号P124

¹⁰ 伊藤佐枝(1999)「二つの家庭、一つの共同体、そして個々の家族たち—志賀直哉『和解』論」『都大論究』第36号P33

のではあるまいか。死と誕生の劇はもっと異なった意味付けをしたい気持ちに誘われるが、「肉親的血縁的」次元にとどまる以上これと例えば先述のMの存在との関連性は薄くならざるをえなくなるのである。たとえ関係付けがされても、竹盛氏のように「家の血脈」に対してMとの結びつきの方を単なる従属的な位置にとどめる¹¹と関谷一郎が指摘したように、こうした理解では作品に描かれた多様な事象を捉えきれないのである。実際、この作品では多くの紙幅を費やして克明にMの存在、天気など「肉親的血縁的」以外の事象が描かれている。こうした事象は単に作品の欠陥として処理していいのか。本稿はこうした「＜和解＞への姿勢に到り着く道程」、「血縁共同体のドラマ」の物語とする従来の解釈に疑問を抱く立場からこの問題を再検証し、『和解』を捉え直したい。

2 語りのあり方について

この作品は「一」～「三」において七月三十一日からのことが語られ、「三」において過去へ遡る。そして「十一」で再び元の時間軸に追いつくという構成になる¹²。以下、個々の断章の具体的な記述を追って、『和解』の物語内容について具体的分析を行いたい。

第一章は、次のように語り始められる。

此七月三十一日は昨年生れて五十六日目に死んだ最初の兄の一周忌に当つて居た。自分は墓参りの為め我孫子から久し振りで上京した（一、P323）。

この第一章で「自分」は死んだ赤子の墓参りに我孫子から上京している。青山の墓地を経て祖母の見舞いに「麻布」の自家に向かった。しかし、「父とだけの不愉快な関係」から「自分」は玄関を避けて、勝手から廻った。第一章で父との不快が語り出され、以降の第二章においてもこうした語り手のあり方が引き継がれている。

自分は八月十九日までに仕上げねばならぬ仕事を持つてゐた。夜十時頃

¹¹ 関谷一郎(1987)「『和解』論の前提」『国文学解釈と鑑賞』第52巻1号P91

¹² 以下、第一章から第三章中頃までの物語を「第一の時間層」と称し、第三章の中頃から第十章までを「第二の時間層」、第十一章の冒頭から第十六章までを「第三の時間層」と称する。

から書いたが、材料が何だか取り扱ひにくかった。(中略) 自分は父に対して随分不愉快を持つてゐた。それは親子といふ事から来る逃れられない色々な縫れ混った複雑な感情を含んでゐたにしろ、其基調は尚不和から来る憎しみであると自分は思つてゐた (二、P327)。

「段々いい」と云つた。それきりだつた。(中略) その場合父が不愉快な顔をすれば、それだけ自分も不愉快な顔をする方だつた。さうしまいとしても自分の頑な気持が承知しなかつた。そして其場が過ぎてても其不愉快は残つて今度は自身を苦しめるのが例であつた (二、P331)。

「二」では、「自分」が現在抱えている創作の仕事、二年ぶりの父との対面が語られる。二つの出来事の時間も異なり、一見雑な構成のように見えるが、そこで父との不快が反復され、強調されている。つまり、語り手の焦点は父との不和に置かれているのである。

「三」の冒頭で「夢想家」という小説を書き直そうとする想念が語り手の連想の契機となったが、途中から「のみならず丁度十一年前」と過去を回想する時間に移し、そして結びは「一昨年の春」の回想をする時間に移るように、物語の時間が第二の時間層へと変転していく。そこでは京都での父との不和、「不愉快」(P337)が語られ、上京した際の父との対面では「カッと」(P338)苛立ちを感じたことを表している。そして最後は父ではなく後妻との感情の不一致をめぐる怒りが語られ、第三章が閉じられるのである。こうした時点の異なる過去の様々な出来事が錯綜している表現の仕方は、単なる語りの混乱によるものなのだろうか。あえてこのような表現の仕方を取ることで、気分が反復されていることを示し、場面と場面を有機的に連結させているのではないだろうか。

つまり、語る「自分」は単一の固定した時点から現在から過去の自己自身を振り返り、時間軸に沿って継起的に出来事を並列するのではなく、水平的な時間軸に無秩序に交わる〈気分〉を媒介にして様々な出来事を語り出していく。従来、この作品の時間構造は「難解」と言われている¹³。こうした作品の分かりにくさは読者の水平的時間の概念に関連すると言えよう。「水平的時間」と言うのは、社会的制度的な有効性を基準に秩序立てられ、過去から未来へ

¹³ 同前掲須藤松雄『志賀直哉の文学』、本多秋五「晩拾志賀直哉(九)―『和解』の成立」参照

向けて均質に流れる古典物理学の時間をその極限值として持つ直線的な時間」¹⁴であるように、読者は水平的時間の流れに慣れている。しかし、『和解』で呈示されたのはこうした「社会的制度的」に形成された水平的時間ではなく、一見無秩序と思われる〈気分〉によって紡ぎだされる流れが表現されていることに特徴があるのではないだろうか。

こうした〈気分〉によって場面と場面を連結するあり方は、第二の時間層を通じて、一貫している。

「三」の中頃以降では一昨年の秋上京した時の父との衝突を述べたにもかかわらず、「四」に入ると突然「翌年の六月に妻は産をする筈だった」と昨年六月の話語り初め、物語の流れが寸断された。そして「四」においては妻の出産にあたって、親族の「皆」が「父と自分との和解の縁になるやうと願つてゐる」(P341)のに対して、「自分」の「此赤児を通してと云ふ氣」(P341)はないながらも慧子を我孫子から東京へ連れていくことに承知し、結果的に赤児の死を招いたことが語られる。ここで赤児の出生と発病そして急死を媒介にして、麻布の人間に対する「不愉快」が語られる。父との衝突、妻の出産、赤児の出生と発病、こうした一見生活の断片に見えるエピソードだが、そこには順吉の不愉快の〈気分〉が反復されている。

「五」「六」においては、赤児の死が緊迫感を持って語られる。「五」において赤児に「小康」(P358)状態が生じ、「総てが僅かづつ順調に行くやう思はれた」(P359)と期待が高まり、「六」においても「兎も角死なしたくなかつた」(P363)と懸命に努力が続けられる。だが、結果的に赤児は死に至り、続く「七」で順吉の「不愉快」が引き出されていくのであるが、ここにも順吉を取り巻く〈気分〉が前景化されている。

「七」においては、赤児の死から改めて麻布の人間に対する「不愉快」が思い起こされ、自分の不快の極点が描かれている。ここで見ておきたいのは、「七」は慧子の葬儀を描く段で始まるが、途中から自分のかつての創作について語り始める点である。慧子の葬儀をめぐって順吉の不快が極点に達し、そしてすべての原因が「麻布の家との関係の不徹底から来ている」と述べられる。ところが、「総ては麻布の家との関係の不徹底から来てゐると思つた。自分は腹立たしかつた。然しそれを徹底させるために祖母との関係をそれに殉死さす

¹⁴ 山崎正純(2013)『文学的身体と歴史』文化科学高等研究院出版局P250

事は自分には出来なかつたのである。腹は立つが、不徹底は毎時も其所から起つて来た。此事は自分の創作する上にも毎時邪魔をした。自分は此五六年間父との不和を材料とした長篇を何遍計画したか知れない。然し毎時それは失敗に終つた」(P366)と下線部分から突然自分のかつての創作について語り始め、物語がもとの時間軸に戻ることなく、これまでの物語の流れが分断された。

「八」では赤児の死によって「受けた心の打撃」(P369)を忘れるために夫婦で旅に出る。旅立ちに先駆け立ち寄った麻布の家では、妻が父から叱責を受けたことに対して順吉は「腹から腹を立て」た。その後、鎌倉の妹の出産で妻は動揺を覚えるが、順吉は「妻を措いて祖母のみる方に来て了つた」。ここでは妻との不和を重点的に語っていることから考えて、妻を媒介として順吉の不快感が集約されているのである。

「九」に至って、妻の懐妊、友人Mが隣村に移住したことで、順吉は「緩みのない気持の日が続くやうに」(P374)なり、それまで停滞していた＜気分＞が「少しづつ調和的な気分になりつつある」(P376)こととなった。こうした＜気分＞の復調が「十」でも引き続き表現され、次女の誕生を通して「快いそして涙ぐましい亢奮」を胸に感じ、そして妻の出産を見て「醜いものは一つもなかつた。一つは最も自然な出産だつた」(P383)と感動し、「総ては美しかつた」(P383)と思うようにまでとなった。

これまで見てきたように、第一、第二の時間層では語り手は単一の固定した時点＝現在から過去へと回想し、時系列的・継起的に出来事を並列するのではなく、水平的時間は無秩序に交わる、自らの＜気分＞の流れに沿って語っているのである。また、物語の内容から見れば、父との関係の変遷といった次元の問題を超え、＜気分＞を媒介にして麻布の人間「皆」、妻、赤児、Mの存在、天候など多様な事象が描かれている。こうした交錯した時間構造と一見生活の断片とも見えるエピソードは、従来小説の逸脱、欠陥として考えられてきた¹⁵。しかし、これまで見てきたとおり、従来欠陥と考えられてきたものをむしろ作品の論理＜気分＞の流れに取り込むものとして考えるべきである。従って、『和

¹⁵ 同前掲須藤松雄『志賀直哉の文学』、本多秋五「晩拾志賀直哉（九）—『和解』の成立」、高口智史「『和解』論」（『近代文学研究』第15号）参照

解』は＜気分＞をめぐる事象の変遷と集積を表現していると言えるのである¹⁶。

3 父との和解

以上のように、第一、第二の時間層では物語が単なる父子関係についての「和解」という結論に向かって唯一の道筋を辿っているのではなく、＜気分＞を媒介にして個々の事象が語り出されるものとなっている。そして、こうした語りのあり方は第三の時間層でも続いている。

「十一」で、三井銀行と麻布の家で散々「不愉快」を味わった順吉は、身体が疲れ、「衰へた気分」に陥た。その後、M夫婦との交流で「三人に通ふ気分の上だけで慰められた」。そして、帰りの汽車の中でロダンの絵から「腹の底に湧き上つて来る亢奮」が得られ、順吉の気分は「気持ちよく解放され」、「自分の心は不思議な程に元気」になる。ここでまた順吉の気分の回復の兆しが認められる。

「十二」で、友人Yが上京するため、順吉は父宛てに手紙を書いた。しかし、「書いて居る内に其父の顔は段々変つて行く、さういふ時には実際書いてゐる自分自身が、そろ／＼と理窟がましい事に入つて行きかけもしたが、其内に父の顔は急に意固地な不愉快な表情をする。自分はペンを描くより仕方がなかった」（P395）と想像の中の父の顔の変化に対応できず、父への手紙を断念した。その後、父と自分との事を題材とする小説「夢想家」に取りかかっているのだが、注目しておきたいのは順吉がこうした調和的な気分の持続に確信が持てない点である。以下、その一節を引こう。

¹⁶ この点について、紅野謙介は（「小説をめぐる小説—志賀直哉『和解』を読む」『月刊国語教育』第十巻九号P80～83）「『和解』の主体系のなかで「自然」性がさまざまな因子を結び合わす網の目の役割を果たしている。心身の状態や出来事の推移を評価し価値づける機軸としての「自然」。墓の下にいる祖父や実母とあたかも対面したかのように言葉を交わす場面があったり、あるいは忌日や命日を通して及ぼされる影響力が陰に陽に期待されたりするなかで、力としての「自然」が構成されている。それは不合理で神秘主義的な自然感としか言いようがないが、科学によってこうした「自然」を妄想として取りひしぐこともできない。したがって自己中心的な発想から動いていくかに見える「自分」はたえず超越的な「自然」の目に見えない原理によって動かされてもいるということになるのだが、実に書くことも「自分」の心身の気分や生理の「自然」の論理においてとらえられているのだ」と指摘している。そして、紅野はそれを「書く自己に対する神話化」とし、「書くこと」の意味に帰着している（紅野謙介「私」が「私」を語るとき—「私小説」の物語」『語文』第79号P 30）。本稿は紅野の指摘を踏まえて、まず作品において＜気分＞に焦点化することがどう実践されたのかを検討して探ると共に、この時期の志賀が抱えていた問題について考えてみたいと思う。

自分は今、父を憎んでは居ない。然し父の方で心からの憎しみを露骨に現はして来た場合、それでも自分は穏かに、今の気持を失はずに父に対する事が出来るだらうかと気づかされた。京都にゐた頃、高等学校に通つてゐた従弟から「貴方の大きな愛が他日父君を包み切る日のある事を望みます」とこんな事を手紙で云つて来た事があつた。其時自分は甚く腹を立てた。「大きな愛といふ言葉の内容を本当に経験した事もない人間が無闇に他人にそんな言葉を使ふものではない」と云つてやつた。自分は今其事を憶ひ出した。自分は自分の現在の調和的な気分で父がどんな態度を取る場合にも心の余裕を失はずに穏かに対する自身を信ずる事は少し自惚れ過ぎてゐると思つた。自分は知らずくの中に、所謂大きな愛で父を包み切る事が出来るやうな気になるのは馬鹿氣た事だと思つた、自身の実際の愛の力も計らずに。

心から、そして努力なしに父が仮令如何なる態度を取らうとそれに惹込まれず、或る余裕を以つて引退つて来られれば此上ない事である。然し今の自分が其場合必ずそれをやらうと考へるのは何処かで一足飛びをした、切れ目のある事考へ方だと思つた（「十二」、P396～397）。

従来、この作品の物語の流れについては、「第八章以降で、和解への感情が獲得されていくプロセスが、着実に描かれていく。「M」（武者小路実篤）との交流が再開されること、その中での恢復、創作活動の再開、そして調和的な気分の醸成。父との関係の修復へのプロセスは、「自分」の全人格的な恢復のプロセスとして述べられる。結果的に、右の文章の和解のイメージは、そのプロセスを予見するものとなり、和解という結末を暗示するものとなっていく」¹⁷という指摘にあるように、「不快」から「快」へ、「暗」から「明」へ」¹⁸と理解されてきた。しかし、引用部分から見ると物語の流れは先行研究で延べられるような「不快」から「快」、「暗」から「明」という単純な理解では説明できないものであることが分かる。

この段で「自分は今、父を憎んでは居ない。」と語り始め、いわゆる「調和

¹⁷ 清水康次(1988)「『和解』の構成」『女子大文学：國文篇：大阪女子大學紀要』第39号P54

¹⁸ 同前掲下岡友加「志賀直哉『和解』論—劇的な＜和解＞を生成するもの—」P37

的な気分の醸成」¹⁹をし、「和解という結末を暗示」²⁰している。が、次の瞬間、「然し父の方で心からの憎しみを露骨に現はして来た場合、それでも自分は穩かに、今の気持を失はずに父に対する事が出来るだらうかと気づかはれた」「自分は自分の現在の調和的な気分で父がどんな態度を取る場合にも心の余裕を失はずに穩かに對する自身を信ずる事は少し自惚れ過ぎてゐると思つた」と順吉は調和的な気分の持続に懷疑を示し、結局「兎に角会つた上の成行きに任せより仕方がないと思つた。感情上の事に予定行動が取れるかのやうに、又取らず事が出来るかのやうに思ふのは誠に愚な事だと思つた」(P397)という内容で締めくくられている。ここで、一定した方向性を持たない無秩序なく気分>が交錯する様子が描かれ、<気分>の「自然性」がクローズアップされることになるのである。

そして、作品は「十三」「十四」でクライマックスをむかえる。

「よろしい。それで？お前の云ふ意味はお祖母さんが御丈夫な内だけの話か、それとも永久にの心算で云つてゐるのか」と父が云つた。

「それは今お父さんにお会ひするまでは永久にの気ではありませんでした。お祖母さんが御丈夫な間だけ自由に出入りを許して頂ければよかつたんです。然しそれ以上の事が真から望めるなら理想的な事です」と自分は云ひながら一寸泣きかかつたが我慢した。

「さうか」と父が云つた。父は口を堅く結んで眼に涙を溜めてゐた。

「実は俺も段々年は取つて来るし、貴様とこれ迄のやうな關係を続けて行く事は実に苦しかつたのだ。それは腹から貴様を憎いと思つた事もある。然し先年貴様が家を出ると云ひ出して、再三云つても諾かない。俺も実に当惑した。仕方なく承知はしたものの、俺の方から貴様を出さうと云ふ考は少しもなかつたのだ。それから今日までの事も……」

こんな事を云つてゐる内に父は泣き出した。自分も泣き出した。二人はもう何も云はなかつた。（「十三」、P404）。

八月三十日の父子和解成立の場面である。母の言う父に一言詫びを入れるということを「感情が其所まで行つて居ないで、只眼をつぶつてお詫することは

¹⁹ 同前掲清水康次「『和解』の構成」P54

²⁰ 同前掲清水康次「『和解』の構成」P54

僕には出来ません。今の僕がお母さんの仰有るやうにお父さんの前へ出て只お詫するのは、兎も角広い堀を一つ飛び越さなければなりませんものね。そして仮りに飛び越してお詫をした所で、お父さんだつて其堀には気がおつきになるから、形式ではお詫が出来たやうでも、それは結果からいつて実際に何にもなりはしますまい」(P401)と述べ、言葉だけによる謝罪を意志として否定し、排除する。一方、興味深いのは父との和解を「泣く」に帰着させる点である。つまり、父との和解は話し合いによる合意、言語によるコミュニケーションではなく、共感した情緒によるものとしているのである。ここで＜気分＞の「自然性」とその結実点が表現されている。そして、以降では「胸に通ひ合ふ和らいだ嬉しい感情」「心と心の触れ合ふ快感と亢奮」という言葉が二度も繰り返され、＜気分＞、情緒の「自然性」が一層色濃く強調されているのである。

従来、父との和解を「予定調和のプログラム」²¹とする指摘がある。しかし、以上のように、＜気分＞が一定の方向性を持たない無秩序なものとして描かれており、和解に向けて順吉の＜気分＞が予定調和のように整備されているものではない。これは自然性を持った＜気分＞、情緒の変遷と集積により父との和解に至ったことを表現しているのではないだろうか。

4 おわりに

前述したように、『和解』は「父との不和」を材料とする小説である。しかし、作品世界は明らかにその枠を超えており、着目すべき点は、＜気分＞がクローズアップされ、＜気分＞の自然性が強調されていることである。ここでは、結びとして一つの明確な意味の解釈に向かって統括していくのではなく、＜気分＞、情緒に着目して作品を考察してみたい。

一般的に、物語においては、登場人物の心情を理解するのに、「情景描写」がよく使われる。つまり、「情景描写」によって登場人物の心情が表現され、造形されるのである。しかし、『和解』に関して言えば、特徴的なのは「情景描写」ではなく、＜気分＞、情緒の表現が多用されている点である。一例として、和解成立の場面での叔父の描写部分をあげてみよう。

こんな事を云つてゐる内に父は泣き出した。自分も泣き出した。二人は

²¹ 同前掲山田有策「『和解』の構造」P80

もう何も云はなかつた。自分の後ろで叔父が一人何か云ひ出したが、其内叔父も声を挙げて泣き出した（「十三」、P404）。

ここで、叔父が何か云ひ出したにもかかわらず、語り手は叔父の発話内容を無視し、「其内叔父も声を挙げて泣き出した」と叔父の泣く行為、共感した情緒に重点を置いている。本来ならば、叔父の発話内容といった細部も描き、読者はこうした細部の手がかりから叔父の泣く行為、共感した情緒を理解する。しかし、語り手が叔父の発話内容を無視することで情緒だけが一層、前景化されていることになる。

以上のように、＜気分＞、情緒に重点を置くあり方は『和解』の作品世界で終始一貫している。その背後には、前述した＜気分＞、情緒の「自然性」に繋がっていると読みとれよう。

自分は父に対する不愉快を与へるのは好まなかつた。然し会ふのは尚厭だつた。自分が其時の現在に持つてゐる父に対する不快を押し包んで何気ない顔で話する事は逆も堪へられなかつた。若しそんな事をして自分を欺き、第三者を欺きした所で何になると思つた（「三」、P335）

自分は亢奮からそれらを宛然怒つてゐるかのやうな調子で云つてゐた。最初から度々母に請合つた穏かに、或ひは静かにと云ふ調子とは全く別だつた。然しそれは其場合に生れた、最も自然な調子で、これより父と自分との関係で適切な調子は他にないやうな気が今になればする（「十三」、P403）

前者では、「父に対する不快を押し包んで」、つまり意志で「不愉快」、情緒を統制することが「自分を欺き」、作為的と位置づけられ、批判されている。また後者では、その時に生れた情緒が「最も自然な調子」とされている。そこには＜気分＞、情緒の自然性への志向が見出せるのではないか。

このように、『和解』の作品世界は＜気分＞、情緒に重点を置くあり方で統一され、そしてその背後には＜気分＞、情緒の自然性への志向に繋がっていると分かる。では、こうした「自然性」への志向は、この時期志賀が抱えた問題とどう関わるであろうか。

周知のように、この時期は文学作品を作家が真の自己を表現するものと見なされ、私小説が文壇を支配した時代であつた。明治四十年に田山花袋『蒲団』

『新小説』明治四〇・九)が発表された。作者の実生活の露骨な告白として受け取られたこの作品は、大きな反響を呼び、一大エポックとなった。『蒲団』が文壇に齎した影響について、小田切秀雄は次のように述べている。

作者の「私」の直接に経験し体験していることが描き出されるくらいに真実の文学はない—という考え方、近代前的な重い習俗によってつくられた体面をかなぐりすてて、その下にある人間性の真実をひき出すことは人間関係を合理的な真実にするであろう—という考え方、また、ヨーロッパの自然主義の場合でも自然科学的な世界観や方法の必然的な影響または摂取によって経験的に正確な事実を尊重するが、「蒲団」のように作者の「私」の経験がそのまま直接に描き出されているのは、ヨーロッパの自然主義に通ずる—という考え方、これらの考え方が「蒲団」を通してひきだされてきたのである²²。

こうした『蒲団』の影響から、以後多くの作家が身の出来事を題材にする方向に転換し、それがリアリティを持つ文学と見なされている。後年発表された「脣が寒い—富士幸次郎君に—」(大正十一・三『新潮』)と題された文章から、志賀が当時『和解』を書きながらリアリティを意識していたことが分かる。

然し『和解』は自分の今までの作中でも代表的ないいものである。あれは親子関係の道德問題を「主題」として書かれたものではなく、もつと直接的な感情—永いく不和の後に漸く来た和解の喜び、それがあの作の「動因」となって書かれたものである。或る「主題」を捕へて作された作物ではなく、もつと直接的な「動因」によって作者が追ひ立てられて書いた作物である。其所にあの作の力があり、読者はそれに惹込まれて行くのである。自分はどの作物もあの行き方だいいと思つてゐない。然しあの作はあの行き方が一番よかったのだ。

何の作為もせず、事実を只その儘に書いて行って、それで芸術品になっている所がいいのである。あの作から単に親子関係の道德問題だけを見ようとするやうな眼はあの作から云はすれば、それは蛙から豚の眼であつて、

²² 小田切秀雄(1958)「私小説・心境小説」『岩波講座日本文学史 第12巻』岩波書店P38

しかも、さういふ問題の認識力から云つてもあの作は自分のものとして、歯切れよく、明瞭として却々勝れたものなのである²³。

志賀は、「何の作為もせず、事実を只その儘に書いて行って、それで芸術品になっている所がいいのである」と述べ、「作為」を批判し、「事実」、「その儘」を提唱した。それは私小説言説で言うところの事実をありのまま描く、つまり「事実/真実/真」と「作りもの/不-真実/虚」²⁴とある二項対立の図式に当てはまることができると言えよう。

『和解』は確かに父との不和の経緯を描いた小説でありながら、明らかにその枠を超えている。そこには＜気分＞の「自然性」を志向し、＜気分＞に焦点するあり方も呈示されている。つまり、志賀は『和解』に到って、私小説の方法を継承しつつ、さらに＜気分＞に焦点化する方法を加えた。＜気分＞に焦点化する方法によって、自然の世界を完成させ、志賀の独自性をいっそう深化させたのである。『和解』は日本の私小説の枠組みの中で志賀が独自完成した方法の形であると考えられる。

【付記】本稿は、2013年12月淡江大学で開催された「2013年度日本語文学国際學術研討會—現場に活かせる日本語学・日本文学・日本文化研究—」で口頭発表した内容に大幅に加筆し、訂正をおこなったものである。

²³ 『志賀直哉全集 第8巻』岩波書店P109

²⁴ イルメラ・日地谷=キルシュネライト(1992)『私小説 自己暴露の儀式』平凡社P456

引用書目

『志賀直哉全集 第2巻』(1973) 岩波書店

参考書目 (年代順)

小田切秀雄(1958)「私小説・心境小説」『岩波講座日本文学史 第12巻』岩波書店

須藤松雄(1963)『志賀直哉の文学』南雲堂桜楓社

竹盛天雄(1970)「志賀直哉における父と子(四) — 「黒い魔術」からの解放 —」『国文学解釈と教材の研究』第15巻16号

国松昭(1977)「志賀直哉における「和解」」(『東京外国語大学論集』第27号

亀井雅司(1978)「『和解』の構造」『論集 日本文学・日本語』第5号

『一冊の講座』編集部編(1982)『一冊の講座 志賀直哉』有精堂出版

山田有策(1982)「『和解』の構造」『一冊の講座・志賀直哉』有精堂

本多秋五(1984)「晩拾志賀直哉(九) — 『和解』の成立」『群像』第39巻9号

西垣 勤(1986)「和解」(三好行雄編『日本の近代小説 I』東京大学出版会

関谷一郎(1987)「『和解』論の前提」『国文学解釈と鑑賞』第52巻1号

山口幸祐(1987)「志賀直哉『和解』 — <鎮魂>のモチーフによる試論 —」『富山大学人文学部紀要』第12号

清水康次(1988)「『和解』の構成」『女子大文学. 國文篇: 大阪女子大學紀要』第39号

紅野謙介(1990)「家族をめぐる物語 — 志賀直哉の短編を読む」『月刊国語教育』第10巻8号

紅野謙介(1990)「小説をめぐる小説 — 志賀直哉『和解』を読む」『月刊国語教育』第10巻9号

宮越 勉(1991)『志賀直哉 — 青春の構図』武蔵野書房

イルメラ・日地谷=キルシュネライト(1992)『私小説 自己暴露の儀式』平凡社

池内輝雄編(1992)『日本文学研究資料新秋 21 志賀直哉・自我の軌跡』有精堂出版

町田 栄編(1992)『日本文学研究大成 志賀直哉』国書刊行会

中原 豊(1993)「『和解』の時間」『山口国文』第16号

池内輝雄(1994)「志賀直哉『和解』における語り手の意識構造 — <母> <義

- 母>の発見—』『国文学 解釈と鑑賞』第 59 卷 4 号
- 澤宮 優(1995)「『和解』ノート—志賀直哉の自然観を中心に—」『論究』第 42 号
- 大野亮司(1997)「“我等の時代の作家” —『和解』前後の志賀直哉イメージ」『立教大学日本文学』第 78 号
- 高口智史(1997)「『和解』論」(『近代文学研究』第 15 号)
- 水洞幸夫(1998)「志賀直哉の『和解』論—墓地に眠る三人と言葉—」『金沢大学国語国文』第 23 号
- 伊藤佐枝(1999)「二つの家庭、一つの共同体、そして個々の家族たち—志賀直哉『和解』論」『都大論究』第 36 号
- 下岡友加(1999)「志賀直哉『和解』論—劇的なく和解>を生成するもの—」『近代文学試論』第 37 号
- 鈴木登美(2000)『語られた自己 日本近代の私小説言説』岩波書店
- 高田知波(2002)「統治力としての呼称—志賀直哉『和解』のジェンダー構成—」『駒澤国文』第 39 号
- 吉岡真緒(2004)「志賀直哉『和解』論—和解の重層性」『活水日文』第 45 号
- 嶋田祐士(2005)「志賀直哉『和解』以前・以後」『緑岡詞林』第 29 号
- 江藤茂博(2011)「志賀直哉『和解』論—父親へのまなざしと弟順三の存在意味—」『十文字国文』第 9 号
- 梅澤亜由美(2012)『私小説の技法 「私」語りの百年史』勉誠出版
- 山崎正純(2013)『文学的身体と歴史』文化科学高等研究院出版局